

第2回幼・保・小合同研修会

と き 平成29年6月29日（木）午後3時～午後4時40分
 ところ 郡山市総合福祉センター5階集会室



講演・演習「幼児期と学童期の発達を考慮した幼保小の連携のあり方」
 ～幼・保・小の滑らかな接続をめざして～
 宮城教育大学教育学部 幼児教育講座教授 佐藤 哲也 先生

講師の佐藤先生は、幼児教育学者として、就学前教育から小学校教育への滑らかな接続、保育・教育の充実など保幼小連携実践に関わっておられます。研修では、幼保小連携の意義やポイント、留意点などについてお話をしてくださいました。一部を紹介します。



非認知的な力とは？

OECDが「社会的情動スキル」としてあらわした。（資料参照）

幼稚園・保育所・こども園での遊びを通じて「非認知的な力」が育つ。「非認知的な力」が基盤となって、小学校での授業では「認知的な力」の育成が中心となっていく。「認知的な力」と「非認知的な力」は互いにかみ合っていて育つ、幸福な人生を送るための「鍵となる力」である。

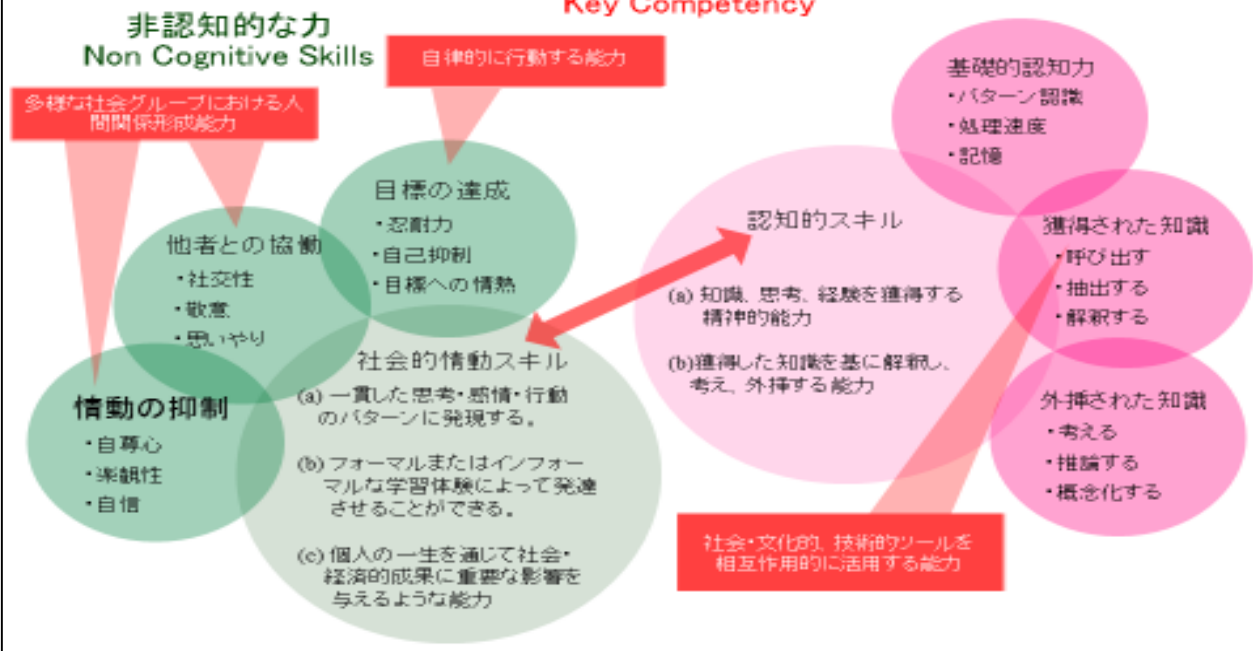
社会的情動スキル(OECD, 2015)

Social and Emotional Skill

主要能力
Key Competency

認知的な力
Cognitive Skills

当日の資料から



この時期に育てたい力 幼児期から児童期にかけて育成すべき資質能力

①主体的に学ぶ態度の育成 ②知識技術のネットワーク化 ③思考力の高度化

- ・「遊び」とは「幼児の自発的な活動」である。子どもは、自発的に取り組んだ遊びの中で、試行錯誤や成功体験を積み重ね、主体性を身につける。また、やろうという意欲がやり遂げようという「意志の力」が育っていく。
- ・子どもに、知識や技術をひとつずつ取り出して教えるのではなく、個別な情報をネットワーク化して活用する力を身につけさせていくことが必要である。何を使って・どうやって・どのくらいとたくさんの知識・技術を駆使しているのか、指導者は「どの領域の、どんな内容が含まれ、どのようにネットワーク化しているのか」遊びを見取ってほしい。
- ・遊びの中で思いを言葉にして話すことや、遊びを題材に語り合う機会を作ってほしい。「今日どんなことがあった？」と振り返ることで、思考の言語と思いを言葉で表現する（言語化）するコミュニケーション力が育っていく。言葉の力は思考力の育成にも繋がっていく。

留意点 連携活動における指導上の留意点

①保育における遊びによる学びのプロセスを重視する。②“協同的な遊び”から“協働的な遊び”への転換（やり遂げる経験）③HostとGuestはケース・バイ・ケース（もてなし・もてなされる体験）

- ・交流の時は、いつも「小学生が主人公（ホスト）」ではだめ。小学生が来園したときは幼稚園児がホストとしてもてなす、体験入学で学校に行ったら小学生が案内してやさしく教えるなど、場に応じてホストとゲストを上手に入れ替え、持ちつ持たれつの経験ができるようにしたい。

「連携・交流」幼保と小に育つ学びは？ 遊びの中の学び（関係論的視点）

①幼稚園保育所の幼児には＝フォロワーにとっての学び

- ・遊びの中の学びとしての観察&模倣（観察学習と模倣学習）。子どもは、「ままごと」「ごっこあそび」のように、大人の世界を見ながら自分なりにイメージを膨らませ、「まねっこ」をしている。交流で、幼児が小学生のしていることを見てあこがれを持ち、真似してみたいという気持ちで、遊びに再現しようとする、良い刺激になる。
- ・発達の最近接領域
1人ではできなくても、ちょっとレベルの高い仲間と一緒に集団的な活動をすることで、できるようになることや分かるようになることがある。小学生と交流することで、イメージや技術・学力など、関わりを通じて幼児は学び取って自分のものにすることができる。
- ・近未来の自分を予感する
幼児は、交流を通じて「小学生になったら自分もこうなる」と予感することができる。予感が実感に、そして理解へと高まっていく。予感（Ahnung）の大切さを説いたのは幼稚園の創始者フレールである。

②小学生＝リーダーにとっての学び

- ・道具主義的学力を発揮する
交流の場で、自分が身につけている力を道具のように使って相手に伝えよう教えようとする。教えることで自分の知識や技術を確かなものにすることができる。
- ・ケアリングの心情を育む
どうやったら相手が喜ぶか、どう接したらよいか考え工夫することで、人のために役立つとする気持ちを抱くようになる。
- ・学びの原点たる自己相対化作業に関わる。
人のために何かしようとしたときに、自分に何ができて何ができないかを考えることで、学びの原点として自分を見つめることができるようになる（汝自身を知れ）。

③きょうどう的關係性の発展による学び

- ・協同（影響の及ぼし合い）→協働（目的に向かって力を合わせる）→共同（役割分担）への展開
連携の中で起こる問題をひとつひとつの局面として理解しながら、幼保小の職員が一緒にプログラムの構想や評価をしていくことが大切。

- ・社会的構成主義的なアクティブラーニングへと展開する
幼保小の連携では「私たちが学ぶ」というスタンスで対話を重ねていく。また、「私たちが幸せになっていく」ために力を合わせて試行錯誤しながら学ぶプロセスを大切にしたい。うまくいかないことがあっても、どうすればよいか考えることが大事。そのため、1回だけのプログラムで終わるのではなく、連携交流は継続していかなくてはならない。

「アプローチカリキュラム」は、ここが大事 アプローチカリキュラムの概要

①小学校生活への適応を意識した内容

- ・幼児教育では午前9時からの2時間が大変重要で、この時間帯に思い切り遊びこむことを保障し、午前中に自己発揮できる生活リズムを作ることが必要である。小学校の入学時は午前が中心の時間割であることも念頭において、登所・登園時間など家庭に協力を求め、生活リズムを合わせていくようにする。家庭と連携することで、小学校と家庭の連携にもつながる。
- ・5歳児になったら、通学を考えた歩く経験や、階段の昇り降りの経験、机と椅子で過ごすことを念頭において、机と椅子（パーソナルスペース）で話を聞く経験もさせたい。給食の時間や午睡をしない時間を作るなどの配慮も必要である。

②小学校での学習を予期した内容

- ・小学校では、グループ活動を大事にしている。遊びの中で、集団で活動することや、遊びを振り返って話し合うことを経験できる機会を作る。その中で、言葉で表現したり話を聞いたりする言語活動が充実させていく。
- ・遊びや生活の必然性から出てくる文字・数字など環境に取り入れる工夫をする。例えば、「新聞記事を貼っておく」ことで、記事の内容に興味を持って遊びに取り入れることなども考えて環境づくりをする。遊びや生活をドキュメンテーションにして積み上げる取り組みも大切である。

③小学校生活を予期した内容

- ・入学後の生活を題材にした「絵本」がたくさんあるので活用できる。
- ・小学生との交流、行事への参加、体験入学などは、子どもが実際に小学校の生活を体験することで、自分が小学生になったときの小学校生活を予感できる機会である。

こんな事例
の
紹介が
ありました

時計の文字盤に色の目印を付ける工夫

「長い針が赤のところになったら、片づけだよ」→生活の中でのちょっとした工夫が「時計の学習」につながる。

絵本コーナーや飼育コーナー

「〇〇見つけたよ」「絵本で調べて見ようか」→生活経験の中でリアルなものを保育に取り入れる工夫が大事。いつでも調べられる経験ができる環境で「調べる」が「学び」へ。

幼稚園訪問（持ちつ持たれつの関係の例）

→「いらっしゃい」と迎える幼稚園児と、幼稚園の遊びを一緒に楽しみ、「今日はありがとうございました、楽しかったです」と感想を話す小学生の姿から、ホストとゲストの関係が分かる。

学校訪問

「小学生と幼稚園児のペアを作って学校たんけん」小学生は小さい子の面倒を見ようとする気持ちで接する。

ごっこ遊びの中の「相談する」姿 → 言葉を使う 集団活動につながる

「忍者ごっこ」を十分に楽しむ園 → 忍者の修行で「遊び込む経験」を保障している。イメージが活動の源泉となって、プロジェクト活動へと発展していく。

「自由保育」とは？

幼保小連携を進めるに際しての〈チェックポイント〉から

① 自由保育における liberty と freedom を取り違えていないか

「自由」は「好き勝手」「支配や束縛からの解放」ではなく、「選択の自由」である。自由遊びの自由は選択の自由、だからこそ、さまざまな活動を幼児自らが自発的に選択できるような環境を用意しておかなければならない。環境には保育者の願い（ねらい）がこめられている。

選んだからには一所懸命遊んでほしい。遊んだら、体験したこと経験したことを言葉にしてほしい。そこから遊びが教育になっていく。

保幼小連携を進めるに際しての〈チェック・ポイント〉

当日の資料から

1. 小学校入学前の幼児をめぐって……

- ①「自由保育」における“liberty”と“freedom”を取り違えていないか？
- ②〈自発的な活動としての遊び〉が十分に保証されているか？
- ③5歳児の際に〈協同的に活動する〉遊びを経験しているか？
- ④午前中に自己発揮できる身体・精神が確立しているか？
- ⑤保護者は小学校教育に不安や心理的距離感を抱いてはいないか？

2. 小学校入学後の1年生をめぐって……

- ①小学校教諭や教室環境が“学校臭く”なっていないか？
- ②スタート・カリキュラムが有効に機能しているか？

3. 幼保小連携活動をめぐって……

- ①保育者と教諭の関係性が構築されているか？
- ②保育者と教諭の互恵性が保証されているか？



参加者のアンケートから

- 幼・保における“遊び”が小学校の“学び”にどう続いていくのか、小学校にいるだけでは分からなかったことが見えてきたように思いました。
- すくすく子育てのテレビで、非認知的な力を遊びの中からつけることが大切であるのを見ました。佐藤先生から改めて講義いただき幼稚園でも実践したいと思いました。
- 幼児期の“遊び”についてもう一度見直し、小学校に滑らかにつながって行きたい。また、人生における土台を育む重要な幼児期に携わるものとして日々に保育に努めていく。